

## 由利画人の系譜・Ⅱ

一増田九木・象江について一

太田和夫・宝池文暁\*

### はじめに

藩政時代の秋田において、絵師を職業とする画家、武士・商人をつとめながら絵筆をとった画家をあわせると、その数は計り知れない。そのなかにあつて、本荘藩お抱え絵師であつた増田九木・象江父子は、本荘・由利地方では現代においてもその作品群が多く残つており、最も親しまれている地方画家であらう。

周知のように、江戸時代の絵画は、狩野派が幕府の御用絵師となつて一大勢力を持った。また地方の各藩においても、狩野派にくみする絵師たちが登用され絵筆をふるつていた。このような時代背景のなかにあつて、増田九木・象江父子は、本荘藩に召し抱えられ活躍したのであつた。ただし、増田父子は、画技において狩野派に抱泥するのではなく、南画系に属する画家といつてよいであらう。現今見うけられる彼らの作品は、山水画、花鳥画、動物画など多種多様なものであり、その数量は、鹿角市に残されている川口月嶺の作品群とともに最も多いと考えられ、彼らの精力的な作画活動がうかがわれよう。

去る昭和55年1月より、秋田県立博物館では「由利の画人」展を開催し、本荘・由利地方の代表的画家として、牧野永昌・梅僊・雪僊をとりあげ、次に増田九木・象江父子を紹介した。前者については、昨年度第5号研究報告において報告したが、本文では、後者の増田九木・象江父子について述べるものである。

ここにおいては、九木・象江の秋田における絵画史上の位置づけを試みるのではなく、調査した資料を提示し彼らの作品上の性格に少しでも近づくとするものである。以下本文では、九木・象江の経歴とそれぞれの作品群の分析の2点にしぼって論じた。

### I 増田九木・象江について

#### 1 増田九木（ますだきゅうぼく）

九木は現在の由利郡仁賀保町の三森に生まれた。生家は農家であつたと伝えられ、名を国文、後曾文と改めた。九木という雅号は、三森の地名からとられたものといわれている。作品の落款・印章には、九木文、九木道人、九木樵者、曾文、曾仲彬、曾尹炳、八々翁、九木山樵などがある。

さて、九木の生年については、いくつかの説がありそれぞれの説の根拠となるところの文献がわからず、また九木に関する文書類を知ることができず、判断しがたいままである。そこで、九木の生没年に関する各説の原文を抜萃してみた。

- ① 嘉永六年歿す、年七九才。（三浦匠三、古今秋田英名録、昭和13年刊）
- ② 嘉永六年病にて歿せり、年七十九。（山方泰治秋田人物伝、大正12年刊）
- ③ 天明二年秋田県由利郡平沢町三森に生まれた。そして嘉永元年六十七才で没した。（小林善七、秋田魁新報紙、大正9年1月26日）
- ④ 安永四・一七七五～嘉永元・一八四八。（太田桃介、秋田県史文芸教学編絵画史 昭和36年）
- ⑤ 九木（きゅうぼく）は、天明二年（一七八二）（略）…嘉永元年三月十三日、本荘において七十四才で没した。<sup>1)</sup>

以上を整理してみると、生年について英名録、秋田人物伝、秋田県史は、1775年（安永4）であり、その他は、1782年（天明2）である。没年に関しては、英名録・秋田人物伝が1853年（嘉永6）で、それ以外は1848年（嘉永元）である。没年だけは、菩提寺の永泉寺（本荘市）に墓があり、これに弘化五年に建立され

\* 県教育庁文化課（前館職員）

たと刻まれている。弘化五年は、実際はなく嘉永元年に改められた年である。したがって、嘉永元年に死去したことは断定できよう。作品に書かれてある年号を検討すると、死去する前年の弘化4年を最後とし、天保・文政・文化年間のものが多い。本荘藩分限帳にある増田家の項には、天保5年と同14年の年号がみられ、晩年に近くなってから祿をもらい活躍したようだ。いずれにせよ、文化・文政・天保・弘化年間に最も制作した事と、嘉永元年に死去した事は明らかだが、生年については、今後の調査を要する。

九木の生地三森は、当時港町として繁栄した地であり、奈良屋などの廻船問屋が栄えたところでもある。このような土地の農家に生まれ育った九木が、どのような経緯で旅に出、そして京都で岸駒につき、また江戸で谷文晁に師事したのか。その確たる証左となる資料が今のところなく判明しないままである。若いころ放浪の旅に出て京都、江戸で絵の修業をしたという経歴は、当時の画家によくあることだが、九木の場合もこれにもれず絵の修業に出かけたと思われる。50歳を越えてから藩に登用されていることなどは、青年期に修業の旅に出、地元に戻ってからその名声が高まり、士籍に抜擢されたという推測もできるかもしれない。

また、岸駒、谷文晁に学んだという伝承も推測の域を出ないが、九木の花鳥画や山水画に彼らの作風と類似したところがあるためにいわれているのであろう。さらに、養子の象江が谷文晁の門に入っていることなどにも伝承の生まれる原因があるのではないだろうか。

つぎに、良寛と交友関係にあったという説については、その間の経緯を示す資料に接することはできないが、九木の作品群のなかの「良寛嬉戯図」（写真1）がその関係を示唆する唯一のものであろう。この作品は、良寛が児童と戯れている光景を絵画化したもので、それに良寛の自筆とみられる五言絶句が書かれてある。内容については後述するが、九木と良寛の親交を思わせるには、充分すぎる程よくできた内容となっている。これもまた推測の域を出ない。今後の調査に期する。

天保5年（1833）、本荘藩より召し抱えられ絵筆を思うがままに振ることになる。本荘藩分限帳には次のように記されている。「増田家 高三両 増田九木 一、天保五<sup>甲</sup>年七月十六日、画道出精=付、御切米金

貳人御扶持被下、御城下引越、一、同十四<sup>癸</sup>卯年七月朔日、絵道出精=付、今度表御徒士格別、」。この士籍に列せられる天保年間、それ以前文化文政期に最も多く制作しているが、このこともその間のいきさつを示すようで興味深い。

嘉永元年（1848）、他界する。墓は永泉寺（本荘市）にあり、戒名は「煙波堂主人九木居士」。

## 2 増田象江（ますだきさえ・しょうこう）

象江は、1818年（文政元）12月9日、本荘の五十嵐家で出生した。この出生時の詳細については、象江の碑が立つ本荘市愛宕山光風園におられる須藤直吉氏が「鶴舞第31号」で述べている。これによると、象江の父は、象潟塩越の佐々木与輔、母は本荘の五十嵐助左衛門の娘である。佐々木家は、象江が胎内にいる時に一家離散したといわれ、母は実家の五十嵐家に帰り、そこで象江を生んだ。後、小島市芳なる者と再婚した。

1832年（15才、天保3）に上京し、谷文晁の門に入った。そこで、南画の山水を学んだものと推測される。後年、彼の得意とするひとつは山水画であるが、この時に形成されたものであろう。その後、山本梅逸に師事したと伝えられるが不明である。

修業後、郷里に帰り九木の養子に迎えられた。九木は象江の才能をきいて養子にしたのであろうが、それが何年の時なのかはわからない。須藤氏は、象江が20才代になってから養子になったのであろうと、推論しているが、筆者もこの説に同意する。おそらく、九木が士籍となった天保5年以降で、絵師としての増田家を継がせるに足る人物と判断してから養子に決めたのであろう。従って、修業後の20才を過ぎてのことと考えてよいのではなかろうか。

嘉永元年（1848）、象江は九木の跡を継いで士籍になり、絵師として活躍することになった。本荘藩分限帳には、「増田松洞 被下象江 一 嘉永元<sup>戊</sup>甲年五月十五日、貳人御扶持被下、一 同年七月十五日、御切米金壹兩貳歩 御廣式」とある。

嘉永5年（1852）には、六郷政殿（藩主）の命により、富士山の写生に出かけ表富士を100枚描いた。象江の作品はすべて粉本主義によって描かれているのだが実際に富士の姿を見て写生していることは象江にとって貴重な体験であったろう。惜しいことに、その他の

作品に全くといっていい程生かされていないのが残念である。

明治15年(1882)に再び富士山写生のため山梨及び長野に出かけた。これも六郷家の命によるもので、六郷家との深いつながりを示している。

前年の明治14年には京都に行き、三条実美公に謁見している。<sup>2)</sup>

明治18年(1885)には北海道函館に遊び、臥牛山という山を写生しており、号にも臥牛山人を使っている。

また、象江には珍しい形の木や石を拾い集める趣味があったらしく、<sup>3)</sup>自然木を刻んだ肖像がある。これは前述の須藤氏に所蔵されるもので、その他に襖絵や象江の写真が遺品としてある。須藤家と象江の親交を語るものであろう。かつて、明治23年(1890)、須藤家は天然館なる陳列室を建設し、これら象江の資料を公開したことがあった。象江の作品中の款記に天然館という名称を入れたものがある。(写真12)

なお、象江は名を曾信<sup>4)</sup>といい、雅号には象江の他に文舟、松洞、木石長者、木石山人、帯硯翁、佩硯翁、蓬萊山人、溪山堂、臥久山人、香雪園、など数多くあり、彼の風流な一面をのぞかせている。

明治30年(1897)11月17日、「雲の上、耳長うして菊の花」の句を残して永眠した。戒名は帯硯堂木石長者象江居士。

九木と象江の筆塚(写真2)が由利郡金浦町金浦字谷地に建っており、今もなお当時の彼らの活躍ぶりを偲ぶことができる。<sup>5)</sup>

## II 作品について

### 1 九木の作品にみる典型

九木の作品は、後記一覧表にまとめてみたが、大きく画題別にみると、山水画、動物・花鳥画、人物画に分類される。描法別にみると、南画の様式に則った山水図、中国の花弁翎毛の画譜によった花鳥図、線を重視した人物図、筆勢がうかがわれしかも軽妙な図、墨気をよくあらわした図、などに大別される。作品数の面からいうと、山水、動物花鳥、人物の順になる。山水図が最も多いのは、南画家としての九木の特徴を端的に物語るもので、谷文晁や鈿雲泉らに学んだというような逸話が残される原因とも考えられる。内容的には、中国の山水風景によるいわゆる南画で、初期の作

と思われるものは別として、円熟したと考えられる時期の山水画は大部分が一様な画面をもっている。次に動物・花鳥画の場合は、虎之図(写真3)を好んで描いている。虎之図については、とりたてて描法上の新鮮味はないが、委嘱されて様々な図柄をこちした九木の一面をうかがうことができよう。花鳥画は、前述のように中国の画譜によるものだが、賦彩、構図ともによくまとまっている。また数的にはわずかしか接見することができなかったが、人物画においては端正な線描と抑えた色彩の堅実な仕事をしたものが多い。他には、梅之図を墨で表現した作品があり、梅の香の漂う空間の表現を墨を最大限に活用し成功している。

以下、1)、南画様式の山水図、2)、中国画譜による花鳥画、3)、線を重視した人物図、4)、筆勢のある軽妙な図、5)、墨気がよくあらわれた梅之図、の項目をたて、各々の実例を示しながら論ずる。

#### 1) 南画様式の山水図

九木の描いた山水図のうち主に制作年が記されている作品をあげると、「溪山急雨之図」(弘化4年)、「僊山樓閣図」(弘化3年)「山水図」(天保8年、写真4)以下、天保7、天保5、文政元、文政12、弘化2の山水図がある。これらの制作年をみると、文政元年(1818)の作品をのぞいては、天保元年(1830)前後から晩年にかけてのものが圧倒的に多い。以上の山水画の筆法はほぼ同じで、峻峻たる岩山、世俗を脱した高士、岩山の間に見える楼閣、中国大陸の蕩蕩とした湖沼、などの配置と賦彩を変えたものが多い。米点による岩山、青緑或いは水墨での描法、いずれも南画を学んだ作画態度であろう。九木自身の性格は奔放自由なものであったと伝えられているが、こと制作にあたっては、山水図を例にあげても極めて堅い仕事の上に成立している。また、制作年が晩年にかたよっているが、このことは早期に山水画を描かなかったとは言えないが、やはりある程度の技術的な完成を経た後半に多く手がけたということも推定できよう。南画の技法が伝わっていない作品がごくわずかしか見うけられない点においてもうなずけよう。いずれにせよ、九木の作品中最も多いと考えられる山水画は、彼の最も得意としたものであったことは疑うべくもない。

#### 2) 中国画譜による花鳥図

九木の花鳥図は量的には少ない。すべての作品を調

査していないので断言はできないが、山水画に比較してみると制作数はかなり落ちる。ただ、画質からいうと九木の力量がうかがえる作品である。その作例のひとつに、仁賀保町の個人に所有されている「花鳥図」（紙本墨画、天保3年、写真5）がある。岩に花鳥をそえる伝統的な東洋画の手法であるが、墨の濃淡を多く使いわけた佳品である。このような作品が量的に少ないにもかかわらず、質的に高い水準を示していることに疑問を感じていたが、本荘市の個人に蔵されている画帖（写真8）に接見し疑問が解けた。この画帖は九木が「十竹齋畫譜」を臨模し自ら34頁の帖に仕立てたものであった。その各図をみると、九木花鳥画にある草花木、岩、鳥、賦彩などと類似したものを多く看取することができる。十竹齋畫譜は、中国清時代に胡正言の撰、模写による中国古書画が収められたもので、我国では、江戸時代絵師に大きな影響を及ぼした「芥子園画伝」とともに、普及した画譜といわれている。九木の模写した帖は、彼の筆力を知ることのできる好資料であり、粉本構成による九木の作画を裏付けることになる資料でもある。

その他の花鳥画と同様な装飾的作品として、屏風絵「狐の嫁入之図」（紙本着色、六曲一双、写真7）がある。この屏風は、元来仁賀保の廻船問屋奈良屋に旧蔵されていたもので、後世同町の寺と酒造家のもとに分割所有されている。款記に辛卯夏日とあり、天保2年（1831）の制作となっている。九木の屏風絵は少なく、その理由はわからないが、この作品によって屏風という大画面の構成に関しても九木はかなりの才能を発揮している。惜しいことには、右隻の彩色がかなりとれているが、左隻と並置して総合的に見るとその画面構成の巧みさがうかがわれる。秋の七草にみえかくれする狐の行列と、金砂子の雲にかすんでみえる月などは、日本画独特の空間処理をうまく使ったもので狐の嫁入りという伝説にとった主題にそう表現と技術的な装飾がうまく調和している。山水画、中国人物画などを描いた一時代前の九木の作品群のなかでは、極めて新味のある画面となっていて興味深い。

### 3) 線を重視した人物画

九木の人物画については、仁賀保町の個人蔵となっている「利休居士像」（絹本着色）と本荘市の旧家に所有される「関羽像」（写真9）の2幅をもってその

特徴がわかる。この2像とも歴史上の大人物であり、その威厳を表現するかのよう、人体の輪郭線、衣服の襷の線などはとくに堅牢であり、伝統的な線を重視した日本画のひとつの典型をもっている。賦彩の画でも他作品と同様に控え目であり、子の象江と比較した場合の相違する要素であるが、このことが九木作品の方により高い画品を感じとれる原因ともなっている。この他に、特筆すべき人物画に象瀉町の旧家にある「郭子儀」（絹本着色、写真10）がある。この画題も日本画によく使われるものではあるが、見るべき要素としては、他作品よりもとくに色彩を巧みに駆使していることである。中国人物の衣服の表現に彼の色彩感覚がうかがわれよう。

### 4) 筆勢のよくあらわれた軽妙な図

九木作品のうち、「良寛嬉戯図」（写真1）と「群鶴図」（写真11）の2幅は、彼の筆勢をうかがえる格好の作例である。前述のとおり「良寛嬉戯図」は良寛との交友を示唆する貴重な資料ともなっているが、良寛の「かすみたつながき春日を子どもらと手まりつきつつ今日も暮しつ」を彷彿とさせる。画面上部には良寛自筆とされる賛がある。良寛が鞠遊びする子どもらにまためぐりあい、なごやかに語っていることを意味しており、画面と一致するものである。

描法においては、少ない筆致で良寛の顔に表情をもたせ、黒衣を側筆で柔かく描いている。肩には笠をかけ、旅僧であることを暗示し、回りに戯れる児童は、筆勢のある線でのびやかに描き、その動きを端的に表現している。この作品と同様の筆致は、他に1幅しか見ていない。

一方の「群鶴図」であるが、これは様々な鶴の姿態を描き分けた小品である。九木の鶴に関して「あきた・秋田人物伝<sup>13</sup>」のなかに次のような伝承が記述されている。「ある人の話によると、旅行中（多分信州長野県でなかろうか）ある寺の新築の襖に鶴の絵を依頼された。……九木の絵がなかなか出来ないしいつも夜遅くなるまで、ローソクをつけて起きているので、小僧が、禁をおかしてそっとのぞいて見たところ、九木は、自ら鶴の姿態をさまざまにまねて障子に映して下絵をとっている」。このような話は大画家の逸話としてよくあるものだが、小品「群鶴図」には、この逸話に即したようなすぐれた点がみられる。鶴の群を横

長の紙面に配置し、変化のある鶴の姿態を軽妙に描き込んでおり、数多い九木の山水画よりも明確に彼の画技を見ることができる。

#### 5) 墨気がよくあらわれた梅之図

九木のこの種の梅の図は、今回は4幅のみ調査するにとどまったが、梅之図はもっと描き残されているということを、地元の美術愛好家より聞いている。

九木の描く梅は、墨の濃淡をうまく使いこなし、老木木の梅の枝ぶりや花の表現、梅の香が漂う空間表現に九木一流のものを看取できよう(写真6)。九木の代表的作品といっても過言ではない。

#### 2 象江の作品について

象江の作品に関しては、九木よりも調査を進めることができず、従って全体的な把握をしているわけではない。しかし、山水画、花鳥画のジャンルに象江のスタイルといってもいい独自のものがある。ただし、明治30年まで生存したにもかかわらず、一部の作品を除いては、粉本構成による旧来の姿勢を保っている。同じ秋田の地内で象江とほぼ同時期に活躍した画家に平福穂庵がいる。穂庵の作品には近代の精神を思わせるものがみられ、作品内容においては格段の差があることはもはや疑うべくもない。しかし、地方の美術史、とりわけ近世後半から明治初期の絵画史を形成する作業上、象江を調査し記録することは必要である。なぜならば、これらの積み重ねの上に他との比較、或いは取捨選択が成立すると考えられるからである。

ここでは、わずかな調査により作品傾向を論ずることになるが、1) 山水画 2) 花鳥画 の2項目に整理し述べることにした。

#### 1) 山水画

山水画のなかで、象江が好んで描いたものに、南画系の画家たちがよく作品化している「蘭亭曲水之図」がある。また、谷文晁に師事し南画の技法を取得していること、山水画を多く描いた父九木の影響下にあったことなどから、やはり南画系に属する画家といっているであろう。

弘化2年(1845)28才時の「蘭亭曲水図」(写真13)と65才時の同題の作(写真14)を比較すると、初期の作品は、色彩において全体に暗く、樹木・山・人物の線描に堅さをもっている。後期の作品は、一様に色彩の明度を高め、筆致にのびのある闊達さを見ることが

でき、その変化を知ることができる。ただ、両作品の構図は、伝統的な三遠法の高遠、つまりは上下遠近法をとっていること、画面全体を一部の省略もない程に一樣に描き込むことでは同じである。このことは、後期の作品の鮮明な色彩と自由な線描の効果を半減させるもので、かえって初期の落ちついた作に共感をおぼえさせる結果になっているのではなかろうか。

この他にあげるべき作品に「五百羅漢之図」(紙本着色、写真15)がある。画題からいうと仏画のようにみえるが、やはり山水画に入る作品と考えてよい。これには、「天賜靈牛象江道人佩硯生作」と記され、73才の時の制作である。水墨で、縦174cm、横92cmの大きな画面に、五百にも及ぶ羅漢が結集する場面を描いたもので、その劇的な情景を表現しようとしたのだろう。しかし、ここでは、それよりも、岩山、樹木などの描法、構図ともに象江のスタイルをよくうかがうことができる。

#### 2) 花鳥画

南画傾向の山水画がある一方で、象江には濃密な色彩を施した花鳥画の作品がある。秋田県立博物館には六曲屏風一双に描かれた四季花鳥山水図があるが、この特色を示す作例である。これには、咲き乱れた草木の花と水にたわむれ、或いは休む鳥などを画面いっぱいに描写したもので、色彩は中間色よりも原色に近い色をふんだんに用いている。花葉、樹木、鳥にみる描線は、装飾的な花鳥画にしては繊細さはなくむしろ大胆である。全体に構図、色彩ともに整理、省略化がない彼の花鳥画の典型がわかる。

今回の調査では、本荘市において同様な作例に接見できた(写真16)。内容描法においては全く同じであるが、軸装の縦長の作品であるため、屏風よりも花鳥画の装飾性が出ている。

花鳥画以外にも屏風、襖など大画面に描写したものが象江にはあるが、このことは父九木と違った点でもある。が、省略化できない彼の作画態度は、大画面におけるよりもむしろ小画面において、その煩雑さが弱まり成功している。

なお、象江の花鳥画には、狩野派系の花鳥、沈南蘋派など中国の花鳥画の影響がある。

以上2項目に分類して象江の作品について述べたが、この他に記すべき作品としては、「虎溪三笑之図」(六

曲屏風一隻、万延元年)と「福祿寿之図」(紙本墨画)があげられよう。これらは日本画のモチーフとしてよく用いられたものだが、前者は象江の作品群の中では力作であり、後者(写真12)は軽く描いたものだが、象江のまた違った筆致をみせた作品である。

#### おわりに

本稿においては、増田九木と象江の経歴と作品の性格に、文献、作品を分析検討することによってふれてみた。今後の課題として、九木については未調査の作品を踏査することは勿論のこと、九木のおいたちに関する文書資料の所在調査が必要であろう。象江については、本荘市小川家に残されている、下絵、粉本、文書類数百件の調査に稿を改める必要がある。小川家資料については、本荘市の教育委員会の方で調査を進めるようであるし、また市に発足する博物館で保管する方向のようでもある。将来その全貌が明らかになることと思う。期待したい。

調査、執筆にあたっては、本荘市、仁賀保町、象潟町、金浦町の各教育委員会、本荘市須藤直吉氏・猪股陽三氏、仁賀保町高木秀造氏・佐々木忠一氏、各作品所有者、秋田県立博物館、皆川忠彦、磯村朝次郎両氏にご協力をいただいた。衷心よりお礼申し上げます。

#### 註

- 1) 67才の誤りである。
- 2) 香雪園という象江の画号は、三条実美公の住居の香雪閣からとったものといわれている。
- 3) 木石長者、木石山人の画号はこのことからつけたと考えられる。
- 4) 曾信の曾は、父九木の曾文からとったもので、養

子になってからの名であろう。

- 5) 明治9年8月に建立されたもので、六郷政鑑が発起人であろう。小室怡々齋の書で文字が刻まれている。筆塚、六郷政鑑 九木曾文先生 象江曾信先生 明治九年八月吉日建立 怡々齋小室秀俊書 佐藤蓬仙 斎藤嘯月 加川休甫などの文字が刻まれている。その他、瓢、鹿、桃、蝙蝠、などの絵が刻まれている。瓢は加(如か) 僊なる者、鹿は象江の息子波江の手によるものである。また福祿寿の文字が刻まれ木石の印があった。おそらく象江が描いたものだろうが図は見えない。その他いろいろな人名らしい字が断片的に残っているが、石の風化でよく判読できない。蝙蝠の図には曾□女添蝙蝠とあり、象江か波江の家族によるものであろう。

#### 文 献

- 1) 三浦匠三 古今秋田英名録 昭和13年
- 2) 山方泰治 秋田人物伝 大正12年
- 3) 小林善七 秋田魁新報紙掲載記事、大正9年1月26日
- 4) 太田桃介 秋田県史文芸教学編絵画史 昭和36年
- 5) 奈良環之助 秋田画人伝・あきた 昭和39年
- 6) 安藤和風 秋田の土と人・土の巻 昭和6年
- 7) 山本元 芥子園画伝国訳釈 昭和5年
- 8) 栃木県立美術館 写山楼谷文晁展図録 昭和54年
- 9) 須藤直吉 増田象江翁と光風園・鶴舞31号 昭和50年
- 10) 渋谷里子 表紙によせて「良寛嬉戯図」、鶴舞30号 昭和50年
- 11) 本荘市史編さん委員会 本荘藩分限帖 中 昭和52年

## 作品一覧表

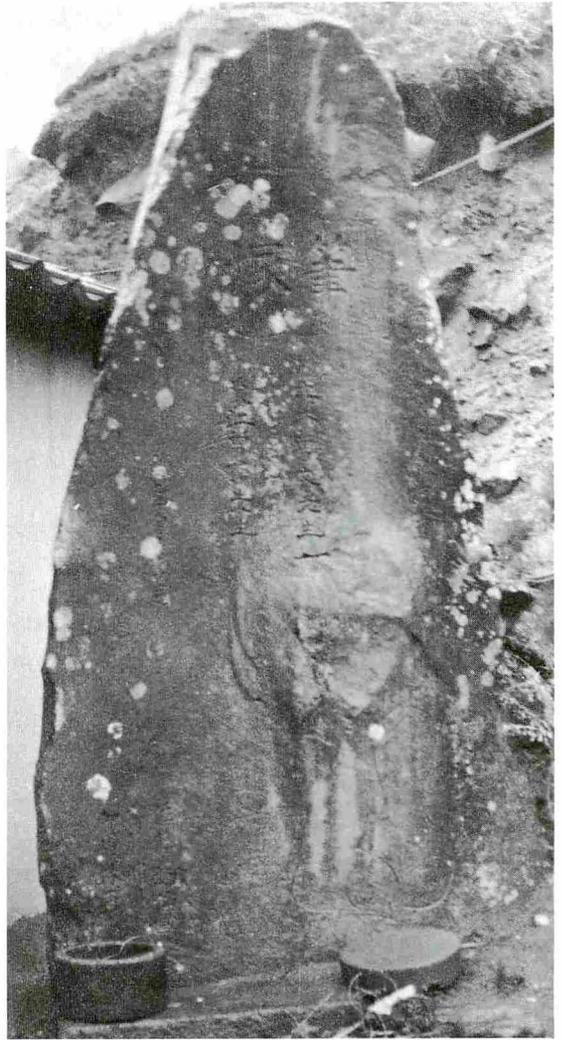
増田九木 〈作品名〉	〈寸法タテ×ヨコcm〉	〈形質〉	〈制作年〉	〈所在地〉	〈備考〉
1. 溪山急雨	127 × 56	絹本墨画	1847年（弘化4）	金浦町	
2. 僊山楼閣	110 × 43	絹本着色	1846年（弘化3）	仁賀保町	
3. 山水	113 × 43	〃	1830年（天保1）	〃	
4. 〃	144 × 76	紙本墨画	1837年（天保8）	本荘市	
5. 緑影釣舟	95 × 32	絹本着色		仁賀保町	
6. 山水	146 × 112	紙本墨画	1836年（天保7）	〃	2曲屏風1隻
7. 秋江独釣		絹本墨画		本荘市	額装
8. 山水	122 × 57	絹本着色	1834年（天保5）	仁賀保町	
9. 秋山水	117 × 48	紙本墨画	1818年（文政1）	〃	
10. 山水	107 × 37	絹本墨画淡彩	1829年（文政12）	〃	
11. 〃	88 × 37	絹本着色		〃	
12. 山村晚鶉	101 × 30	紙本墨画	1845年（弘化2）	〃	
13. 山水		〃	1831年（天保2）	〃	
14. 春秋花鳥山水	162 × 337	紙本着色		〃	6曲屏風1双
15. 花鳥	47 × 48	絹本着色	1843年（天保14）	金浦町	
16. 〃	86 × 31	〃		本荘市	
17. 〃	133 × 58	紙本墨画	1832年（天保3）	仁賀保町	
18. 朱竹	110 × 43	絹本朱墨		〃	
19. 梅（暗香断続）	169 × 94	紙本水墨	1828年（文政11）	本荘市	
20. 梅	177 × 99	紙本墨画	1831年（天保2）	仁賀保町	
21. 〃	110 × 43	絹本墨画		〃	
22. 〃	101 × 29	紙本墨画		〃	
23. 狐の嫁入	158 × 334	紙本着色	1831年（天保2）	〃	6曲屏風1隻
24. 〃	〃	〃	〃	〃	〃
25. 竜虎	98 × 36	絹本墨画	1821年（文政4）	本荘市	双幅
26. 虎	116 × 36	絹本着色	1826年（文政9）	仁賀保町	
27. 〃	119 × 36	〃		象潟町	
28. 亀	99 × 29	紙本淡彩		〃	
29. 兔	26 × 33	絹本淡彩		仁賀保町	
30. 群鶴	25 × 72	紙本着色		〃	
31. 唐人物	114 × 41	紙本着色		金浦町	
32. 漁樵問答	115 × 38	絹本着色	1810年（文化7）	本荘市	
33. 虎溪三笑	122 × 71	絹本墨画	1831年（天保2）	仁賀保町	
34. 利休居士像	88 × 35	絹本着色		〃	玄齋賛
35. 良寛嬉戯図	123 × 28	紙本着色		本荘市	良寛賛
36. 郭子儀	138 × 71	絹本着色		象潟町	
37. 関羽像	101 × 35	〃		本荘市	

38. 唐人物	104 × 35	絹本着色		象潟町	大平亀陰賛
増田象江					
《作品名》	《寸法タテ×ヨコcm》	《形質》	《制作年》	《所在地》	《備考》
1. 蘭亭曲水	115 × 33	絹本着色	1845年（弘化2）	本荘市	
2. 〃	140 × 96	紙本着色	1882年（明治15）	〃	
3. 〃	120 × 42	統本着色	1888年（明治21）	〃	
4. 〃	116 × 49	絹本着色		仁賀保町	伝象江筆
5. 桜芥書屋	99 × 93	紙本着色	1892年（明治25）	本荘市	襖絵
6. 蘭亭曲水		〃	1882年（明治15）	〃	〃
7. 水亭避暑	129 × 69	紙本水墨淡彩	1883年（明治16）	仁賀保町	
8. 花鳥	108 × 56	絹本着色		本荘市	
9. 桃下鴛鴦	134 × 34	〃		〃	
10. 岩に蘭	111 × 56	紙本墨画		仁賀保町	
11. 福祿寿	81 × 58	〃	1878年（明治11）	〃	
12. 〃	167 × 82	紙本墨画淡彩	1890年（明治23）	本荘市	
13. 〃	111 × 61	紙本墨画	1878年（明治11）	仁賀保町	
14. 大黒	112 × 53	紙本着色		本荘市	
15. 虎溪三笑	155 × 336	〃	1860年（萬延1）	象潟町	6曲屏風1隻
16. 五百羅漢	174 × 92	紙本墨画	1890年（明治23）	本荘市	
17. 臘梅	174 × 115	紙本着色	1895年（明治28）	〃	襖絵
18. 虎	127 × 69	絹本着色		象潟町	
19. 松竹梅鶴亀		〃	1839年（天保10）	本荘市	

これは昭和54年4月から12月までに調査した、本荘由利地区の九木・象江作品である。



① 良寛嬉戯図 九木筆



② 筆塚



③ 虎之図



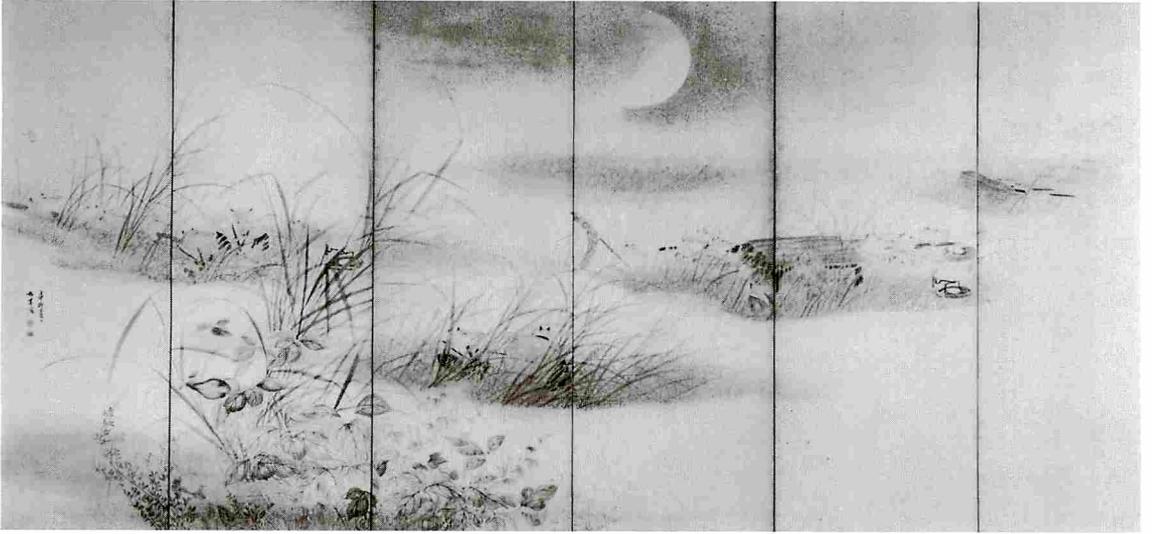
④ 山水図 九木筆



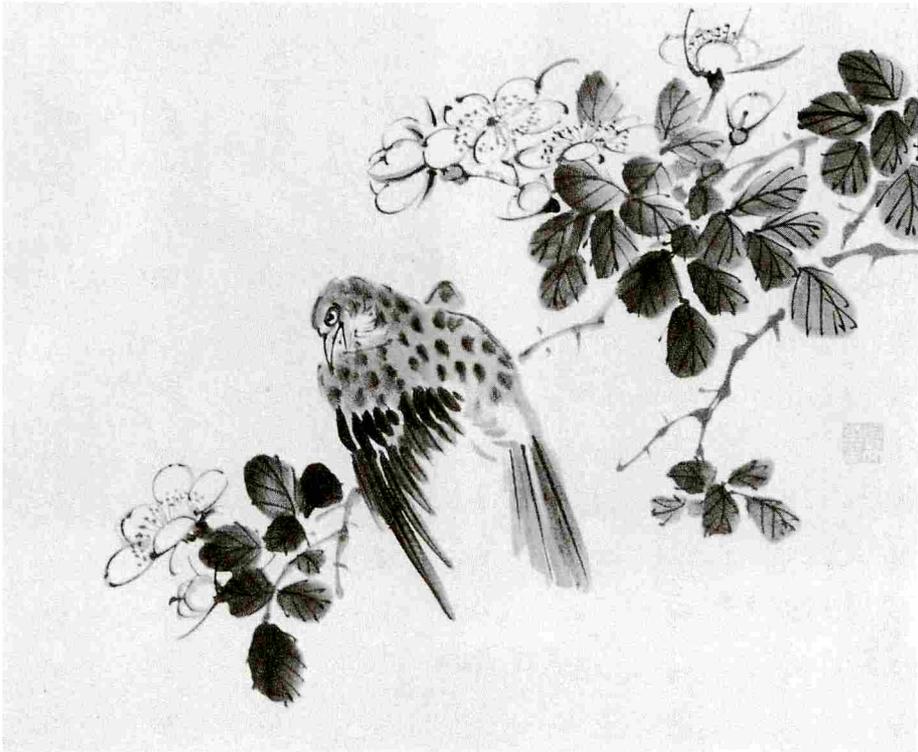
⑤ 花鳥図 九木筆



⑥ 梅之図 九木筆



⑦ 狐の嫁入図（左隻） 九木筆



⑧ 十竹斎書画譜模写 九木筆



⑨ 関羽像 九木筆



⑩ 郭子儀 九木筆



⑪ 群鶴 九木筆



郭子儀 落款



⑫ 福祿壽 象江筆



⑬ 蘭亭曲水图 象江筆



⑭ 蘭亭曲水图 象江筆



⑮ 五百羅漢圖 象江筆



⑯ 花鳥圖 象江筆